

騎士リッタ  
KGK  
著

---

Ritter  
*written by KGK*  
*Copyright ©1998, 1999 by KGK*

俺はあの男を許せない。いつか復讐をしてやる。今はまだだめだ。機が熟していない。だけど、みてろよ。いつか必ず復讐をしてやる。あの男、第三六代銀河帝国皇帝フリードリッヒ四世——俺のシュザンナを奪った男。

シュザンナとは幼なじみだった。俺はベーネミニュンデ子爵家の召使いである下級貴族の碎。彼女の方が身分が上だったが、彼女はそんなことは関係なく、俺と仲良く遊んでくれた。いずれ、結婚することになるかも知れないと、ぼんやりと夢見ていた。身分の違いは、なんとかなるものだと思っていた。

シュザンナと俺の身分の違いが想像

以上に大きいと気がついた俺は、士官学校に進学した。軍人になれば才能次第でかなり出世でき、シュザンナとの結婚も夢では無くなる、そう思つたからだ。しかし、子爵家の狩で筋がいいと誉められた射撃もせいぜい中の上から上の下辺り、他の科目はほとんど落第寸前という有様だった。

そんな中、何故か「情報分析」だけはトップクラスだった。特に噂の分析に関しては教官が舌を巻く出来だった。考えてみれば、大貴族の社会は噂で成り立つているといつても過言ではなく、子爵家の末端にいる俺にとつては、噂の真贋を見極めることは死活問題だ。俺は自然に噂の取り扱い方を覚えていたのだ。

世の中、上には上がるるもので、そ

の「情報分析」でも俺は常に二番にしかなれなかつた。常に一番の奴に俺は興味を持ち、話をしてみる気になつた。会つてみるとそいつは、青白い顔をした妙な目つきをした男だつた。その男パウルは、公表された情報から背後の事実を分析するのに長けていた。俺とパウルは意氣投合し、よく議論するようになつた。もつとも、はたかた見れば、俺が一方的にまくしたてるのをパウルがうるさそうにぼそぼそ反論してるようにしか見えないだろうから、仲がいいようには見えなかつたかもしけないが。

そんなある日のことだ。とんでもない話が持ち上がつた。皇帝がシユザンナを後宮に迎え入れるというのだ。俺の知らないうちにその話は進行し（あたりまえだ。こんな下端に一々報告する義務がどこにある？）、士官学校の寮に通知が来たのは全てが決定された後だつた。そして、シユザンナが後宮に入つてしまふまでの間に、彼女の本音を聞く機会はなかつた。

俺はパウルに相談を持ち掛けた。俺の話が終わるのを無表情に待つていたパウルの言葉は意表を突くものだつた。

「君は君の道を行くがいい。私は私の道を行く。当分、会わぬのがよいだろう」

それだけ言つて差出された右手には、深くくいこんだ爪の跡があつた。俺はその手を取り、そして無言のまま分かれた。奴がシユザンナを個人的に知つていたとは、この時まで気付かなかつた。

パウルのすることには、いつももつともな理由がある。今回は多分こういうことだ。皇帝に復讐するにしてもシュザンナを救出するにしても、巨大な相手を敵に回すことになる。今の我々が手を組んだところで、気付かれれば一撃で吹き飛ばされる。ならば、別々に行動して、力を持つた時点で（生き延びていれば）共同戦線を張ることにした方が、まだ成功率が高い。しかも、一方からの攻撃よりも二方向からの攻撃の方が効率がよい。

それに、俺とパウルが手を組めば、ど

ちらが主導権を握つたとしても他方は押しも押されもせぬナンバー2になるだろう。「ナンバー2有害論」を持論とするパウルが容認出来る事態ではない。

そもそも、おそらく彼にはゴールデンバウム王朝の打倒を目指す彼なりの理由がある。ここは下手に手を組むよりもそれぞれの動機で、それぞれの手法で行動した方が得策だろう。

### 3

目標は二つ。シユザンナの救出と皇帝への復讐。

後者は直接的には困難であるし、前者が成功すれば後者の代用にもなる。では、前者のシユザンナ救出に焦点を絞つてみよう。

基本戦略はすぐに決まる。シュザンナをなんとか後宮から連れ出し、オーディンを脱出し、フェザーン経由で自由惑星同盟に亡命する。その後、同盟領の辺境で姿をくらまし、フェザーン経由で、今度はこつそりと帝国に戻り、

辺境に潜む。この時点で見付からなければ、少なくとも十年は見付からずに済むだろう。

ところが、個々の戦略目標を考えると頭が痛い。どうやって後宮から連れ出す？ 後宮の様子が分からなければ判断不能。後宮から宇宙港へ行く方法は？ 情報不足。フェザーン商人をまるめこんだとして、官憲に見付からずにつの船に乗る方法は？ 情報不足。どこで実働部隊を手に入れる？ 武器の

調達は？ そのための資金は？ この様子ではすぐに実行するのは無謀だ。ここはじっくり腰を据えてかかるべきだろう。

まずは情報収集の手段を整えねばなるまい。全てはそれからだ。正しい判断は、正しい情報と正しい分析の上に、初めて成立するのだから。ベーネミニュンデ子爵家からシュザンナについて行つた召使い連中に後宮の情報を流してもらうことにして。ヨハン爺さん辺りか？ これは組織化する必要はあるまい。俺自身が乗り込むことも考えたが、召使いの中でも末端にいる男のそのまた息子となると、そんなことはまず無理だし、入り込めたら入り込んだで視野が狭くなる。

士官学校の同期にマイセンという男がいるが、こいつは共和主義にかぶっている。本人はうまくカモフラージュしてるつもりだろうが。こいつをうまく焼きつければ適当な組織が作れるだろう。他にも使いやすい奴はあるが、狭い人間関係の中から何人も使うのは危険なのでマイセンだけにしておく。

奴と俺の繙がりを推測しにくくするために、軍に入つて行動を拘束されるのを防ぐために、何か理由をつけて士官学校を中退することにしよう。どうせ学ぶべきことは全て学んだ。パウルとの十分の議論は士官学校での一年の講義よりも価値があったのだから。

地下に潜伏して活動するには、暗号名が必要だろう。複数の暗号名を使うにしても、代表的なのは一つ選んでお

くか。「騎士」。シユザンナが俺につけた秘密の渾名。これでいくか。

そういうしているうちに後宮のヨハン爺さんから連絡が入った。意外にもシユザンナは後宮の暮しにすぐに順応してしまったようだ。これは、救出作戦を立てたところで、シユザンナの協力が得られないことを意味する。こうなつてしまふと、シユザンナを取り返すためには荒っぽい方法しか残らなくなる。皇帝への復讐を優先させた方があるいは近道かもしれない。

どちらにしても、すぐには無理だ。俺はあちこちに網を張つて、待つことにした。

俺は複数の独立した組織を作り、これを情報網として使った。マイセンの

オーディン共和戦線を始め、中級貴族連絡機構、帝国の盾、奴隸解放同盟、ヴァルハラ革命軍、などなど。これらの組織は主義も目標も全く違うのだが、情報が全て暗号名騎士(リッタ)で表わされる人物に渡され、時には騎士(リッタ)から情報をもらうことだけは共通している。当然、どの組織も他に騎士(リッタ)と繋がつてる組織があるとは思つてないし、騎士(リッタ)の正体を知るものはほとんどいない。

俺はそれらの組織を作るときに細かい指示は出していない。どんな集団でも二%程度以上いる落後者や不平を持つ連の中からカリスマを持つ奴を選び、そいつの気に入るようなビジョン

と実現可能に見える計画を吹き込んだだけだ。それで失敗するような組織には用がない。

情報網をこのように作つておくことの利点は、まず、多角的な情報が入ってくることだ。それぞれの組織がそれぞれの動機で情報を集めるから、情報が質的に多様だし、一つの事実を多方面から捉えた情報を入手出来る。

また、一般の人々の想像に反して、非合法活動を含む組織はその規模に比例して多数の合法組織を必要とするものだが、その規模が大きくなるにつれて資金の流れから発覚しやすくなる。その点、俺の組織群は一つ一つの組織の規模が小さいため発覚し難く、たとえ一つが発覚したところで他に影響を及ぼし難い。

欠点は、派手に動けば末端組織がからくに気付く可能性が高いということぐらいか。

一年余りかかって、情報網が順調に稼働し始めた頃、シユザンナ懷妊の報が入る。シユザンナがあの男の子供を生むのは耐え難いことだが、俺が動くまでもないだろう。それよりもシユザンナ自身の身に危害が及んではならない。ここは子供を犠牲にしてでもシユザンナを守る方策をとるか。

赤子は代わりがないがシユザンナの代わりなどいくらでもいる、シユザンナを害することはリスクの割に効果がない、そう念を押しておこう。もちろん、念を押す相手は皇帝の二人の娘とその夫達、ブラウンシュヴァイク公とリッテンハイム侯の両夫妻であるし、そ

れは匿名の誰かからの忠告として彼等の耳に入るだろう。

こうして起るべきことは起り、起るべからずことは起らなかつた。その後は同様な事態に手出しする必要はなかつたし、その他の本質的な進展も無かつた。

次の展開の小さなきづかけが起つたのは、数年後のことだつた。

## 5

シユザンナがあの男の後宮に入つてから七年目、下級貴族の娘があの男の後宮に迎え入れられたという噂を聞いた。あの男はそれまで何人の女を漁つていたが、今度はいつもに増してご執心だとか。

グリューネワルト伯爵夫人の称号を与えたその娘は、なるほど昔のシユザンナに匹敵する程、いやそれ以上に可憐だった。

これはチャンスかもしれない。その時はそう思った。あの男のシユザンナへの寵愛が無くなりつつある。今、あの男から引き離せば、少ない抵抗で彼女を取り戻せるかもしれないと。しかし、……。シユザンナは後宮から逃れる気はさらさら無いようだ。グリューネワルト伯爵夫人への嫉妬に狂い、あの男の寵愛を取り戻そうと必死に画策しているという。伯爵夫人を排斥する行動も待きないらしい。

もうシユザンナ救出には意味がないのかもしれない。ようやく俺はそこに思い至った。そんなことは何年も前に

分かっていたはずのことだ、後から考えればそう思える。認めたくなかっただけだと。それはそうだろう。俺の活動の第一の目標だったのだから。でも、もういい。分かった。あそこにいるのは俺の知ってるシユザンナではないと思うことにして。あのやさしかったシユザンナはもう死んだのだ。あれは、ベーネミニュンデ侯爵夫人——シユザンナの皮をかぶつた別人だと。

そして、行動の主軸を第二目標に移そう。あの男への復讐。これだけはなんとしてもやりとげねば。だつてどうだろう？ あの男は、俺のシユザンナを永久に奪つたのだから。これはシユザンナのとむらい合戦なのだ。

皇帝を暗殺するのは難しい。宫廷内に強力なコネでもあればなんとかなるのだが、せいぜい帝国騎士の称号しかない下級貴族にそんなコネがあるはずもない。情報網を張るのが精一杯だ。しかも、暗殺に成功したからといってどうだというのだ。老人が一人死ぬだけだ。遅かれ早かれ、第三第四のベーネミュンデ侯爵夫人が生まれるだろう。

ならば、帝国の屋台骨を搖がすようなことをしなければ意味がない。帝国の敵となると、当然、自由惑星同盟だが、奴等もあてにならない。万が一、奴等が勝ち続けたとしても、フェザーンがしゃしゃり出てくるに決まってる。だから、帝国を内部崩壊させる方が、まだ実現させやすい。だが、どうやって？

ここは、パウルの「ナンバー2有害論」を逆手にとるか。組織を不安定化させるために、自他共に認める第二人者を作る。これでなんとかなるだろう。

現在、皇帝に次ぐ者と言えば、ブラウンシュヴァイク公とリッテンハイム侯の二人、やや落ちて国務尚書リヒテンラーデ侯。三疎みの状態では現状の打破は望めない。かと言つて、この三者のいずれかに肩入れしても帝国の体质は変わらまい。それよりも軍人の方が都合がよい。専制君主国家における突出した才能を持つ将軍。これが何を意味するかは歴史が示している。

だが、誰に肩入れすればいい？ パウルの意見が聞きたいところだが、接触するにはまだ早い。自分の情報網に頼るしかないだろう。

「噂には必ず一片の真実が含まれている。しかし、どの一片がそれであるかは分からぬ」

情報心理学のテーマの一つだ。しかし、一つの噂の異説を多数集め、それを重ね合わせることで背後にある事實をつかめることがある。これが、俺の情報網が本領を發揮する使い方だ。さらに、噂の伝搬経路による歪み方を知つておくと、推測が容易になる。そのため、数年前から定期的になんらかの噂を流し、それを多数のポイントで観測し、噂がどのように伝播し、どの経路でどのように歪められるかを確かめている。

公表された情報を縦糸に、噂を横糸にして織りあげたタペストリーに浮びあがる人物像。それらを丹念に調べて、俺

は肩入れすべき人材を探していった。そのような人材がそうやたらといふはずもなく、次の局面を迎えるまでには、さらに数年の歳月を必要とした。

## 7

「私の騎士になつて」

「はい、シユザンナ様」

もう、大昔に思える俺とシユザンナとの会話。口ではシユザンナ様と呼びながら、心中ではいつもシユザンナと呼んでいた。あの時以来、俺はシユザンナ個人の騎士だったのかもしれない。士官学校に入学するときにもらつた帝国騎士(ライヒス・リッター)の称号は、俺には意味のないものだった。そもそも俺は帝国に忠誠を誓っていない。

「騎士」<sup>リッタ</sup>。それはシユザンナと二人の間だけで通じる、俺の渾名だった。今でも俺は、あの頃のシユザンナに仕える騎士なのだろうか？ 激務の合間に、ときにはそんな疑問を持った。しかし、感傷にひたつて暇は、あまりなかつた。

ベーネミニュンデ侯爵夫人（もうシユザンナとは呼べない、もうシユザンナとは呼ばない）のグリューネワルト伯爵夫人への攻撃は徐々にエスカレートしてきている。最初は嫌がらせ程度のことだったのだが、やがて伯爵夫人の命を狙いだし、それが叶わないとなると、その弟、ラインハルト・フォン・ミューゲルの命まで狙いだした。

幸いなことに、度重なる策謀を彼は切り抜けてきている。俺と似たような立場の男として同情していたので、さ

りげなく情報を歪めることによつて未然に防いだものもあるのだが、カチエ・プランカやイゼルローンまでは俺の手は届かない。どうやらその手のことが起つたらしいという情報が後から入ってきた。どうやつて切り抜けたのか分からぬが、とにかく彼は生き残つた。

これはどうやら運だけではなさそうだ。彼は的確な判断力と高い戦闘力を持つている。その戦歴を見る限り、軍人としての才能は超一流だ。カリスマもある。しかも、皇帝の近くに強力なコネがあるので、どんどん出世している。

「これはいけるかもしれない」

俺はそう思つた。

それ程の才幹を持つて、着々と立場を強めている者がいるということは、帝国にとつて潜在的脅威である。彼に姉を奪還する意志があれば実力をもつて行なうだろうし、その意志が無くとも、

帝国に自他共に認めるナンバー2が早晩現わることになる。おそらく、彼に賭けるのが唯一のチャンスだろう。これを逃がせば今後百年間にチャンスがあるとは思えない。

しかし、彼の立場を強めることに協力するのは、シユザンナと決定的に敵対することになる。分かつてはいるのだ。シユザンナが道理に背いていることも、たとえ、シユザンナの計画が成功したとしても遅かれ早かれシユザンナは滅びるということも、それが、別のベーネミニュンデ侯爵夫人を生み出すだ

けでなんの解決にもならないことも。頭では分かっているのだ。

俺は途方に暮れた。

## 8

「騎士、あの木の実を取ってきて」「騎士、どゝ」見てるの。おまえは私だけを見てればいいのよ」「あのね、騎士。私、空を飛んでみたいの」「まあどうしましょ、この子犬びしょ濡れよ。騎士、何か拭く物持つてない?」「騎士、……。騎士、……」

最近、昔のシユザンナのことばかり思い出す。そんな中で今朝思い出した言葉。

「大貴族の誇りというものは死よりも重いものなの。だからね、騎士。<sup>リッタ</sup>誇りを失なうぐらいなら、私は死を選ぶべきなの」

あの幸せな日々の何処にこんな言葉の入る余地があつたというのだ。まだ十代になつたばかりの少女の言葉とは思えない。その言葉を今になるまで忘れていたとは。

今のシュザンナは、確かに誇りだけにすがつて生きてるよう見える。しかし、そうやっていられるのも今のうちだけだ。誇りを捨てれば生き延びることが出来るが、そうでなければ滅びる。その選択は、早ければ数年、遅くとも十年以内に迫られる。ならば、シュザンナを華々しく散らせるのが彼女の為なのだろうか？

分かつたよ、シュザンナ。もう迷わない。今日から俺は君の敵になる。そして、君の人生の最期を華々しく飾つてあげよう。

こうして俺は、本格的にミューゼル少佐に肩入れすることに決めた。

彼に関して気になる点と言えば、出世するにつれて敵が増えるのに比べて、味方がなかなか増えないことだ。赤毛の友人は確かに有能だが、味方が一人だけではどうしようもないだろう。彼の味方になりそうな人物をリストアップするのは簡単だが、問題はどうやって彼の味方にさせるかだ。

噂を武器にするしかないか。「金髪の坊や」に関する噂を制御する。彼の気質に共感する者の注目を引くように。

彼は下級貴族として育つたせいか、質素を好み、平等を好む傾向にある。また、才能ある者を好む。では、そのような性質が知れ渡るように、噂に微妙な変調をかける。流れてくる噂に、あるものは足し、あるものは引いて、しかも不自然にならないように加工して、再び流す。

「我等が金髪の坊やがまた勝つたんだって？」

「そうさ、見事なもんだ」

「しかも、分艦隊の中で一番動きが良かつた艦の艦長に声をかけたっていうじゃないか」

「そうそう。『卿の操艦は見事であつた。私から艦隊司令官に伝えておこう』だときさ」「さすがだねえ」

こうして、さざ波のように彼に関する噂を浸透させて行くと、彼と共に鳴する者が浮かび上がってくる。オスカー・フオン・ロイエンタール、ウォルフ・ガング・ミツターマイヤー、エルネスト・メックリンガー、ウルリッヒ・ケスラー、……。そして浮び上がった連中が彼の目に留まる。ついでに兵士の間での人気が高まる。

何年もかかる気の長い作業だ。しかし、これは後で必ず生きてくる。そして、革命の原動力となるはずだ。

## 9

愚行だったクロップシュトック侯の反乱と愚行に愚行を重ねた討伐も、一つだけ良い結果を残したようだ。

ロイエンタール少将とミッターマイヤー少将がミューゼル大将の味方になつた。両少将は共に軍人として有能である上に、ロイエンタール少将は大貴族の様子をよく知つてゐるはずだ。ベーネミュンデ侯爵夫人に対抗するのが少しは楽になるだろう。メックリングガーナ准将もミューゼル大将にアプローチを始めたようだ。

しかし、いいことばかりは続かない。味方を得たミューゼル大将がベーネミニュンデ侯爵夫人に対し反撃に出たのだ。あらかじめ噂として流しておいた宮廷医師グレーザーの動向はロイエンタール少将の耳に入つていたため、それを挺子にしているようだ。そのこと 자체は当然のことなのだが、これが成功するにはもう一波乱必要で、そのときが

一番危険なのだ。

しかも、侯爵夫人が最近雇つた傭兵の中に特殊部隊あがりの狙撃のプロがいる。シェーンベルク。奴の狙撃を一度だけ見たことがある。雨の中を走る車の後部座席に座つてゐる三人。その真ん中だけをきれいに打ち抜いた。俺も射撃の心得があるだけに、奴の恐しさはよく分かる。

おそらく、ベーネミニュンデ侯爵夫人は——シユザンナのぬけがらは——遠からず激発する。あらゆる情報がそれを示している。これを止めることは出来ないし、また、止めるべきではないのだが、最初の一撃はなんとしても外さなければならぬ。あとはミューゼル大将とその仲間達がうまくやつてくれるだろう。

最初の一撃を外す方法は一つしか思い浮かばなかつた。俺が傭兵隊に入り、シェーンベルクより先に引き金を引くことだ。初弾をはずせば、後はなんとかなる。

傭兵隊に潜りこむ工作で騎士の正体がばれる可能性がかなりある。それを防ぐ処置をしたところで、せいぜい数ヶ月先に延ばすのが精一杯だ。いずれにしても騎士の組織は終る。それなら、積極的に解体した方がよさそうだ。どうせ、がたついてきたところだ。

パウルは宇宙艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥の副官から、統帥本部情報処理科に転属になつたという。奴に収集・分析した情報の主要な部分と一部の組織を引き渡しておこう。残しておくと危険な組織には「時限爆弾」

を仕込んでおく。数ヶ月以内に自滅するだろう。他の組織は、生き延びる力があれば生き延びればよい。

この作戦では、少なくとも一時的には、ミューゼル大将、シユザンナの傭兵隊、警察の全てを敵に回すことになる。おそらく騎士の組織の一部も。そろそろ年貢の納め時かな？ よからう、これまでシユザンナも滅びることだし、一足先に地獄に落ちて、彼女を待つとしよう。

この結末には結構満足している。シユザンナが滅びるのを見なくて済む上、新しい帝国の誕生に一役買うこと出来るのだから。パウル、後は頼んだぞ。  
新帝国万歳。

おわり